



研修概要

2011年3月11日、東日本大震災に伴って福島第一原子力発電所事故が発生した。本研修はこの事故について、そして復興の現状を知るために行われた。私たちは現地観察や資料館の見学、また現地の方や東京電力の社員の方からお話を伺った。本発表では、この研修を通して得たことを踏まえ、「復興」という言葉の意味について検討しながら、これからの福島の形、高校生の私たちにできることの二点を中心にまとめている。



福島第一原子力発電所



行政の考える復興

→東京電力を中心に「形の復旧」を重視
建物の復旧、賠償金、制度による対応などの方向性
東京電力は原子力発電所事故の「加害者」として謝罪

住民の考える復興

「建物を建て、街づくりを進めることだけが復興ではない」という意見もある一方で故郷への帰還を望む人、望まない人の間で分断が生まれてしまっている



行政と住民の感覚のズレ→「復興」の意味を再検討すべき



福島のこれからの姿

福島が「福島らしく」いられる

- 東日本大震災も福島の一部であるという認識のもと、これまでの福島の歴史や文化とともにこれからも残していくことが大切→この出来事を後世に伝えていくために、**震災の遺構を残すことは重要**

遺構について

- どれだけ話を聞いても、いくら調べても、現地に訪れなければわからない空気感のようなものを感じるということが後世に伝えるという点では重要
→新しいまちづくりをする一方で、一部の土地を**震災遺構**として残すような取り組みを



提言 - 私たちにできること -

高校生対象のドキュメンタリー動画コンテストの開催

現在の福島が抱えている問題

- 福島の現在の復興に向けた取り組みや福島の魅力があまり知られていない
- 立場の違いによって人々の間に分断が起こってしまう

多くの人(特に次世代の担い手となる若者)に知ってもらうことが大切

→私たち高校生視点からの動画の作成・公開

+省庁(環境省、復興庁など)が福島の復興に関する動画のコンテストを開催→賞を設けることでより参加に意欲的に

まとめ

今回の福島研修を通して、福島第一原発事故をめぐり行政と住民間、また住民の間でも意見の違いが存在していることを痛感した。今回の経験を通して私たちは、住民、行政の双方が未来の姿を共有し、震災の経験や教訓を次の世代までつなげていくことが大切だと感じた。そのうえで、私たちができることは震災を実際に体験していない第三者である私たちが、その立場からより多くの人に今回の経験を伝えていくことであると考えている。そのなかで、より広くこの研修を知ってもらい、体験する人、「伝える人」がさらに増えることを願っている。